ニホンザルの母子行動

——野外集団において——

糸魚川直祐（大阪大学人間科学部）

研究のねらい

野外に生息するニホンザル集団における母子行動研究のねらいは，以下の点にある。

(1) 野外集団はニホンザルの種維持の役割を果たす繁殖集団であり，そこにおいて母子行動の原点を探る。

(2) 野外集団では，母子を中心とする複数の母系血縁系のメンバーと成体雄などが集団の社会的まとまりを主として作り上げており，さまざまな母系血縁系について母子行動を比較し，集団の社会的まとまりを生み出す要因を明らかにする。

(3) 野外集団では長期的にみると，集団成員の顔ぶれやその社会的位置がさまざまに変わり，また集団が分裂する。このような集団の長期的変化を生み出す要因のひとつが母子行動にあり，集団の社会的まとまりの変化を母子行動と関連づけて究明する。

(4) 飼育場面での母子行動の実験的研究において，母子行動に及ぼす生育環境の変化や母子分離・再会などの影響について，母子の個別的特徴が著しい。このような個別的特徴が生ずる要因を野外集団において調べる。

集団内の母系血縁系の優劣順位

野外に生息するニホンザル集団の成員間の個体関係には，大別して血縁関係と優劣関係とがある。血縁関係は，子を産み育てる母親の系統，つまり母系によって分類される。これが母系血縁系である。これに対し成体雄は，交尾期に一過的に雌と出会い雌を妊娠させることが主たる繁殖活動であり，子育てにはほとんど関与しないので，父親の系統によって子の血縁関係を明らかにすることはきわめて難しい。

本研究の対象である岡山県勝山集団（総数250頭ほど）には，現在20の母系血縁系があり，集団成員のほとんどすべては，この20の血縁系のいずれかの出自である。勝山集団における母系血縁系は，研究開始時の1958年3月において，集団内のすべての成体雌（4歳半以上）をそろぞれ独立の母系血縁系の祖とし，それ以後各成体雌の子孫を同じ血縁系のメンバーとして系統樹にまとめ，定めたものである。

集団の成員間には優劣関係がある。これは成員が互いに出会ったとき，食物の獲得，好ましい場所の占有などについて，どちらが優先的に振舞うかによって決まる。成員間の優劣関係は，おおむね直線的になっており，このような関係を序列化したものを優劣順位関係と呼ぶ。優劣順位関係は，集団成員が闘争を行なうことなく，相互の関係を調節し，集団全体を平和的にまとめるのに役立っている。

集団成員間の優劣関係は個々ばらばらに決まっているのではなく，出自母系血縁系の優劣関係にかなりの程度規定されている。一般に，ごく幼い個体を除きある血縁系のメンバー全員は，他の血縁系のメンバー全員より優位（あるいは劣位）になる。つまり，勝山集団の20の血縁系間にはほぼ直線的な優劣関係が認められ，集団成員はそれぞれの出自血縁系の優劣関係によって，その優劣関係がかなりの程度規定されている。

母系血縁系と母子行動

子は生後1，2週頃まで母親のごく近くにおり，母以外のものと接触することは少ないが，生後2，3カ月頃になると，子は母から一時的に離れて活発に動きまわり，同年生まれの他の子ザルと接触し，遊びなどを頻繁に行なうようになる。このような子ザル同士の出会い場面において，一方の子ザルが他を避けたり，子ザル間に威嚇や軽い攻撃が生ずることが生後3カ月以後ではある程度観察され，かれらの間に優劣関係が生まれつつあることがわかる。

このような幼い子ザル間の優劣関係の成立には，母親の影響が強く作用している。本研究の観察結果によると，一般に，優位な母は自分の子が他から威嚇や攻

撃を受けることが少ないため，子の行動を規制することが少なく，母子間が隔たっている割合が多い。これに対し，一般に，劣位な母は自分の子の行動を規制し，子を手元に引き戻したり母の近くにとどめておく割合が多い。子ザルは母親のこのような行動の違いによって，母親とその血縁系の優劣関係を捉え，それをもとに集団内で仲間と接触する仕方を習得して行くものと思われる。

特異的な母子行動

上記のような血縁系の優劣関係と関連するような母子行動の一般的傾向は，すべての母子に見られるのではなく，特異的な母子行動がかなり観察される。このひとつは，劣位血縁系出自の劣位な母親でありながら，子の行動規制をあまり行なわず，優位母親のように子を手放すことが比較的多い事例である。このような劣位母ザルの子に比べ，母から行動規制を受けることが少ないため，集団内において他の血縁系のものと接触することが多く，出自血縁系の枠組を離れた新しい個体関係を集団の中で作り上げ，優劣順位も母親や出自血縁系の他のものより高くなることが多い。

一方，優位血縁系の母ザルの中には，劣位血縁系の母ザルのように，子の行動を規制し子を手元に引きとめておく傾向の強いものもいる。このような母ザルの子は，母との結びつきが強く，仲間との関係や優劣関係について，母親や出自血縁系のものたちの影響を強く受ける。しかしこのような子は成長するにしたがい，母親や出自血縁系のものたちから離れて行動するようになると，集団内での社会的位置が大きく変わり，優劣順位が下降することがある。

集団内の血縁系について一般的に見られる傾向と異なる母子行動は，上記事例以外にもさまざまなものが観察される。このようなことからすれば，集団内の母子行動を母親の出自血縁系と短絡的に結びつけて説明することにはかなり無理がある。もちろん，母系血縁系と母子行動との関連性を否定することはできないが，今後の研究では，以下の点が留意されなければならない。

(1) 母子行動について，母系血縁系内およびそれを超えての個別的特性を明らかにすること。
(2) 母子行動の個別的特性を探究するための客観的指標を見い出すこと。
(3) 母子行動について，子の成長に伴う長期的変化を追究すること。
(4) 父と子，あるいは成体雄と幼体との行動を明らかにすること。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究のねらい

野外に生息するニホンザル集団における母子行動研究のねらいは,以下の点にある。

(1)野外集団はニホンザルの種維持の役割を果たす繁殖集団であり,そこにおいて母子行動の原点を探る。

(2)野外集団では,母子を中心とする複数の母系血縁系のメンバーと成体雄などが集団の社会的まとまりを主として作り上げており,さまざまな母系血縁系について母子行動を比較し,集団の社会的まとまりを生み出す要因を明らかにする。

(3)野外集団では長期的にみると,集団成員の顔ぶれやその社会的位置がさまざまに変わり,また集団が分裂する。このような集団の長期的変化を生み出す要因のひとつが母子行動にあり,集団の社会的まとまりの変化を母子行動と関連づけて究明する。

(4)飼育場面での母子行動の実験的研究において,母子行動に及ぼす生育環境の変化や母子分離・再会などの影響について,母子の個別的特徴が著しい。このような個別的特徴が生ずる要因を野外集団において調べる。